

## 人生の最期を豊かに過ごす余暇支援をめざして ～患者と家族と共に過ごす余暇生活への支援～

○今井 悦子 草壁 孝治 四垂 美保  
(医療法人社団慶成会青梅慶友病院)

A 老人病院では、「豊かな最晩年をつくる」ことを目標に掲げている。リハビリテーション室(以下リハ)は様々な専門職が医療/看護/介護スタッフと連携している。リハでは職種別に基礎生活支援と余暇生活支援に大きく分類され、レクリエーションワーカーとデイケアスタッフは余暇生活支援に携わっている。また8割から9割の患者にとっては終の棲家となる。そして残された人生を豊かに過ごすことは、院内生活において生活の質の維持向上に繋がると考えた。そこで余暇生活支援スタッフは様々な余暇支援の提供をしている。

支援方法として、スタッフが直接行なう直接的支援と物品貸出等の間接的支援の両面から支援内容を探る。また余暇支援はスタッフだけでなく家族の理解と協力も欠かせない。

本研究は人生最期の余暇時間を患者と家族が共により良い時間を過ごせるよう、直接的・間接的支援で関わった事例を通して報告する。そして終末期を豊かに過ごすためには、どのような余暇支援が望ましいか、また余暇支援を提供することで患者と家族にどのような影響があるのかを検証する。

### 高齢者における主体的なレクリエーション活動のあり方

バーン・ゴルフ愛好者の生活習慣調査及びグループ・インタビューから  
○古泉一久〔淑徳大学〕、△横内靖典〔城西大学〕、△西田俊夫〔淑徳大学〕  
キーワード 高齢者 生活習慣 自己効力感

【研究背景と目的】高齢者におけるレクリエーション活動への取り組みは多様性をみせており、なかでもスポーツ活動への参加は身体、健康への意識を反映して盛んにおこなわれている。本研究では、高齢者がレクリエーション活動を主体的に継続するための要因について分析、検討する。

【方法】対象者は1週間に1回以上バーン・ゴルフを行っている72歳から76歳の高齢者5名(男性3名、女性2名)であった。調査は回答選択式の質問紙を用いて、生活習慣調査、運動セルフ・エフィカシー尺度について行った。さらに対象者全員に、バーン・ゴルフを含んだレクリエーション活動への取り組み方等を把握するためのグループ・インタビューを実施した。また、加速度計を用いて、日常生活1週間分の身体活動量を測定した。

【結果】バーン・ゴルフ歴は2～10年で、いずれもProchaskaらの行動変容ステージモデルでは「維持期」に相当したが、運動セルフ・エフィカシー尺度では3名について高い得点がみられ、2名は低い得点であった。さらにグループ・インタビューによりいくつかの知見が得られたので報告する。